
世界を渡る召喚士

学生ひきこもり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を渡る召喚士

【Nコード】

N3096Z

【作者名】

学生ひき二ート

【あらすじ】

世界を渡る召喚士が物語る。世界の「変化」を求めて。

・・・この小説は主人公視点でお送りしています。

新しい物語

「んで、君が今回応募した理由を聞きましたよか？」

「まあ、これでも結構色んなところに行ったことがあるので、そろそろ別のところに行ってもいい機会かなーと思って」

「なるほどね。うん採用。君の適正に合いそうなところを送るからそこから入って」
「ども」

俺は目の前にいる奴にそう言われて、そいつの後ろにある扉の中に入ってしまった。

扉の中に入り、外に出ると、そこは何も無い平原だった。

後ろを振り向くと、そこには同じ風景が広がっている。扉なんてこの風景に不釣り合いなものはない。

成功だ。

話に聞くとところによると、かなり確率は低いがたまに失敗することもあるらしいので、一安心だ。

俺は、取り敢えず歩き始めた。

さっきの面接は……正式名称は知らないが、簡単に言えば、「世界を渡るための面接」だ。

世界を渡るといふのは、別に大げさに言っているわけではなく、今

いる世界から別の世界に行くことだ。

各世界には、世界を維持する「均衡」という概念の他に世界を変える「変化」という概念を必要としている。

これはどの世界にでもいる神信深い者からすれば、傲慢と捉えられるかもしれないが、世界というものは人が動かしている。

つまり、この「変化」というものは人によって作られる。

それは、その世界の住人がその世界を変えるのではなく、その世界の常識や定義といったものを根本から覆すような者によって引き起こされるものだ。

俺は俺たちのようなやつらを「渡り人」と呼んでいる。

渡り人の仕事は至極簡単で、自由に行った先の世界で過ごすことだ。それだけで、世界に大きな変化を生む。

変化はやがて常識や定義となって、世界に浸透し、世界が腐敗しないように働きかけるのだ。

というわけで、俺は新しい世界へと、たった今降り立ったのだ。ファンタジーな頭の持ち主には羨ましがれるかもしれないが、その世界で生きていくのに必要なものは自分で調達しなければならぬし、知識もなく、人脈もなく、雨風をしのぐ家もないのだから、割りりと来た当初は苦勞する。

俺が担当するような世界は、大抵言語でコミュニケーションを取る文化があるところなので、そういうところでは実は苦勞が少ない。なぜなら、俺には「共通語力」というものがあるので、俺が何を喋ろうと相手にこちらの言葉の意味を伝えることができるからだ。

よって、当面の目的は、「拠点づくり」と「生活力の確保」である。

「召喚せしは、《タンサクソウサ》」

俺がそう唱えると、目の前の風景に歪みが生じ、その中からウニと
いう生物のように種類豊かな望遠鏡をハリの代わりに生やしたもの
が現れる。

「応えしは、我、《タンサクソウサ》」

『それ』はそう応えて、俺の前に浮かび続ける。

「この付近に人がいそうなところを探してくれ」
「了解した」

《タンサクソウサ》はそのまま上空に浮かび上がり、しばらくゆっ
くりと宙で回転を続け、その後少しして回転を止めた。

「ここより西方に、主が足で三半刻の場所に人の群れを確認した」
「わかった。ご苦労さん。戻っていいぞ」
「了解した」

そう言っつて、そのまま《タンサクソウサ》は霧のように消えていっ
た。

俺は言われた通りに西に足を進めた。

さっきのは、俺が持つ唯一の能力である「召喚術」。
まあ詳しい説明は、追々するとして。
俺が渡り人として、やってけるのも、この能力があるからだとも言
える。

この物語は、俺が勝手にこの世界で過ごしていく、なんの変哲もない、他愛のない日記のようなものだ。
だから、暇なやつが暇な時に適当に読むことを薦める。

さて、新たな俺の物語を始めよう。

門番

三時間ほど歩いて俺が辿り着いたのは、程々の高さの外壁に覆われた港町であった。

淡い砂色の外壁は、海の青と潮風と陽の光の強さと相性がよく見えた。

俺は港町の門に近づく。

門に近づくに連れて、行き交う人の波が目立ってくる。

俺は港町に入るために、門番を探した。

門番をすぐに見つけた俺は、軽装の鎧を見に纏ったその門番に話しかけた。

「ども」

「ん？ 何かようか？」

「この町に入りたいんだけど、いいか？」

「んん？ 変なことを聞くやつだな。入りたければお前のその足で入れればいいだろ？」

不思議そうに門番は首を傾げる。

「ああ、そうなのか。悪いね。てっきり許可がいるのかと思って」

俺がそう言つと門番は軽く笑みを見せた。

「ははは！ 変なことを言つやつだな。どっかのお国の城下町じゃないんだ。そんなことせんよ」

「そうなのか？ 密輸とかするやつだっているだろっ？」

「そんなのは勝手にやらせておくよ。第一、後ろ暗いものを運んでいけば、この門にある『解析』の魔法が反応するだろうからな」

ふむ、そんなものがこの世界にはあるのか。

魔法がある世界は2回行ったことがあるけど、常時発動している魔法を見たのは初めてだな。

門番は俺を見て、さらに言葉を続ける。

「むしろお前みたいに、俺に話しかけるようなやつのほうが、怪しいぐらいだよ」

「ああ、それは済まない。まあ悪さはしないから安心してよ」

「はは、どうせどこかの田舎から出てきたのだろ？俺も暇だったからな。簡単にでいいならこの町のことを教えてやるうか？」

「それは助かるな。是非頼む」

そうして俺は、この世界で初めて会話した門番の男からこの港町のことを教えてもらった。

町の名前は「ゼー」

意味は、町のシンボルにもなっている渡り鳥の鳴き声からとったらしい。

渡り人の俺としては、縁起のいい話だ。

この町の特徴としては、予想通り海産物の輸出が大きな産業となっている。

海産物は「水」と「風」の合成属性である「氷」の魔法がかけられた出荷箱に収められて各地に輸出されている。

町の建物の構成としては、

「町役場」「商館」「海師場」「宿泊施設」「各種ギルド」などが俺が気にすべきものとなる。

「海師場」というのは、俺が一番最初にいた世界の漁業組合とほとんど同じものだ。

「各種ギルド」は、

「戦士ギルド」……モンスター退治などの荒事専門。

「探掘者ギルド」……薬草採取や鉱石探掘専門。

「僧侶ギルド」……この世界の神を信仰し、人々の回復専門。

「魔法ギルド」……魔法研究専門。

「盗賊ギルド」……人に頼めないようなこと専門。

ギルドはこの5つがこの街にはあり、城下町のような大きなところに行くとき、さらに他の専門ギルドがあるらしい。

「盗賊ギルド」は禁止している町もあるため、他のギルドに関しては大抵の町と呼べる大きさのところにはあるらしい。

俺は簡単にこれらのことを門番から聞いた後、町に入り、まずは手持ちの異世界のを換金してから、各ギルドを回ることにした。

戦士ギルド

質屋で所持品とこの世界の通貨を交換した俺は、戦士ギルドへと足を運んでいた。

ゼーの町の戦士ギルドは、堅牢な石壁で建てられていて、デカデカと木製の看板を入り口の上に掲げていた。

入り口の脇の石柱には、「腕に自慢があるなら戦士ギルドへ！！」新ギルドメンバー募集中！！」と豪快に書かれたポスターが貼つてある。

俺はそのポスターの印象で、このギルドがどういっやつらがあるのか予想しながら、戦士ギルドに入っていった。

「んあ？ 依頼ですかい？」

入ってすぐ目の前にある受付にいる以下にも脱力している男が話しかけてきた。

無精髭に、寝ぼけた目の中肉中背の男で、髪と服装だけは、少し乱れているぐらいでまだマシといった風貌だ。

「いや、このギルドがどういっものか聞きに来ただけだけだ」

「んだよ。冷やかしかよ」

男は依頼ではないと知っ、面倒くさそうな口調になる。

「んで説明を聞きたいんだけど」

「あーん？ 入団しに来たんじゃないなら帰ってくれ。こちとら色々忙しいんだよ」

どう見ても忙しそうには見えない。
こんな接客能力が無いやつが受付で、このギルドが機能しているの
か疑いたくなつた。

「ちよつとガルさん。どうせ暇してるんだから、そのぐらいしてあげなさいよ」

後ろから聞こえてきた声の方を向くと、入り口ホールのテーブルに腰をかけている一人の女がいた。

赤めの茶髪に、ハッキリと開かれた目、愛嬌のある表情でこちらを見ている。

「うつせえなエイル。じゃあお前が説明してやれよ」

「あなたの仕事でしょそれは」

「ほら、お前。そこに座つてるやつから説明を聞いとけ。入団する気になつたら俺のところ来い」

そう言つてガルと呼ばれた男はダルそうに机に伏せた。

俺は言われたままにテーブルに腰掛けている女のところ足運んだ。

「悪いわね。ああいう人だけど、あれでもそれなりに腕の立つ人なのよ」

そう言つて、軽く笑みを浮かべながら、女は俺に対面に座るように手で促した。

「そんな風には見えないけど、人は見かけによらずつてやつか？」

「ふふ、まあそんなところよ」

俺はテーブルの席に腰をかけた。

「改めまして、私はエイル。このギルドの5番隊の隊長をやってるわ」

「これは丁寧に。俺は……」

さて、なんて名乗ろうか？

……まあ、別に本名でいいか。こういう小さいところでも世界に影響を与えるのが俺達の仕事だしな。

「ケンイチだ。よろしく」

「珍しい名前ね。どこの出身？」

「ここから西にかなり行ったところにある小さな村さ」

こういう場合、当たり障りのない適当なことを言っておくのが常套手段である。

いきなり、異世界からだと言っても、変人扱いされて動きづらくなるかもしれないしな。

「へえ、そうなの。まあ戦士ギルドは出身地に関係なく、とにかく腕に自信がある人なら大歓迎だから大丈夫よ」

「それは助かるね」

あれこれ条件出されても困るしな。

「それで、今日は説明だけでいいの？」

「ああ、しばらくはこの町を拠点に活動しようと考えているから、どのギルドに所属しようか決めているところだ」

「なるほどね」

納得がいったようにエイルはうなずく。

「まあ、説明と言っても、あれこれ細かいことはあまり無いから安心して」

「わかった」

そのぐらいが丁度いいと思う。

「取り敢えず、このギルドの主な活動は、簡単に言えば『戦闘が必要な依頼を請け負い、解決すること』よ」

「まあなんとなく想像できるよ」

「ふふ、そうね。仕事内容の多くは、モンスター討伐になるわね。」

あとは、護衛の任務も結構あるわ」

「なるほど。わかりやすい」

「でもわかりやすい分、荒事が多いから、失敗は許されないし、怪我が致命的になることもあるから注意してね」

「ああ、わかった」

「まあ詳しい依頼の受け方とかは、入団してから説明を受けるから、もし入団したら聞いてね」

「了解」

エイルの説明は回りくどくなく、わかりやすい。

「あと、入団する際は『入団試験』があるから、受ける気があったら、受付で手続きして」

「入団試験って何をやるんだ？」

「それは担当になったギルドメンバーが決めるから、これだ！っていうのは無いわね。気分で内容を変えることなんてよくあることよ」

「なるほど」

「必要なのは、腕っぷしと臨機応変に動けるかだから、その辺を意

識して受ければ大丈夫よ」

「……それは教えていいのか？」

「大丈夫よ。意識しても出来ない人なんて山ほどいるから、この程度の情報は問題ないわ」

「納得した」

なるほど。

大体このギルドが何をやっているかはわかったな。

「ありがとう。大方わかったよ」

「そう。なら良かったわ。あなたが実力のある人だったら、この戦士ギルド『ドードン』はあなたをいつでも歓迎するわ」

「ああ、情報ありがとう。それじゃあ」

俺は机に銀棒（この世界の通貨は棒状のものである）を一本置いて、出口に足を運んだ。

「あら、別に良かったのに」

そう言いつつも、ニッコリとした笑みを浮かべているエイルを少し見て俺は戦士ギルドを後にした。

次は採掘者ギルドに足を運ぼう。

採掘者ギルド

採掘者ギルドは以外に早く見つかった。
というより、戦士ギルドから目視できる位置にあった。

採掘者ギルドは、重厚感ある木造の建物で、その建物にそぐわない煌びやかな看板が掲げられている。

安物の鉱石ならいいが、高価なものだったら盗まれるよな。絶対。
案外知らないうちに一個ぐらい減っているかもしれない。

俺は、入り口の横に貼ってあるポスターに目を配る。

「根気のある人随時募集中。私たちと一緒に夢を追いかけてませんか？」

………夢を掴みましようぐらいは書けなかったのかと少し思いながらも、俺は採掘者ギルドに入ってしまった。

「ようこそ採掘者ギルド『ミレラリオ』へ！」

「あ、ども」

開口一番元気の良い挨拶を受付の女がしてきた。

ついつい先ほどの戦士ギルドとのギャップに尻込みしてしまった。

「本日はどのような御用ですか？」

「ああ、このギルドに入るか決めかねているから、その説明を聞きたいんだが……」

「はい。畏まりました」

ふむ。このギルドは（受付の）感じが良くていいな。

「では、ご説明しますね」

「よろしく」

「このギルドでは主に、採集・採掘の依頼を請け負って、それを解決いたします」

「例えば、どんなことをするの？」

「簡単なものとすると回復薬の原料となる薬草の採集を行ったり、装備品などの製作に使う鉱石を取ってくるなどです。難易度が高い依頼になりますと、古代遺跡の調査などですね」

「へえ、そんなまでやるんだ」

「はい。この町では滅多にこういう依頼は来ないので、あまりないんですけどね」

そう言つて、受付嬢は苦笑いする。

あまり期待はしないでおう。

「遺跡が近い町や大きな街ですと、それ専門のギルドがあったりするんですけどね」

「まあ、そういうのにまだ興味はないので、大丈夫ですよ」

「そうですか。では、説明を続けますね」

受付嬢は一呼吸入れて、説明を続けた。

「わたくしどものギルドへの入会は、どなたでも可能です」

「戦士ギルドみたいに入会に試験とかはあるのか？」

「いえ、ございません。ギルドへの入会の際は、簡単な書類を作成して終了です」

「へえ、それだけでいいのか」

「はい。しかし、注意点がございます」

「注意点？」

「はい。依頼を受ける際に、契約金を、依頼を担当する方が支払う義務がございます」

「どのくらい払うの？」

「それは、依頼内容によって異なります。依頼難易度が高いほど、契約金は高くなります。これは、依頼失敗の際に依頼者への謝罪金とギルドの信用を損なった罰金として徴収致します」

「依頼を達成したときは、契約金は返ってくるの？」

「はい。全額をお返しいたします」

なるほどなるほど。

これは割りと信用できそうな感じだ。

「ありがとう。他に注意点はある？」

「はい。後は、これは我々の希望なのですが、根気のある方が入会していただけると助かります」

「というと？」

「はい。依頼内容が……その、まあ地味で、単純ですので、やめてしまわれる方が多いんですよね」

ハハハ、と受付嬢が乾いた笑いをする。

確かに、飽きるよなー

「わかったよ。説明ありがとう」

「いえ、もし興味を持たれましたら、是非ご入会下さい」

「ああ、それじゃあ」

俺はそう言って、探掘者ギルドを後にした。
建物を出て、もう一度俺はポスターを見る。

………確かに、夢を追いかけるが正解だな。

そう思いつつ 次に向かう先は 僧侶ギルドだ。

僧侶ギルド

僧侶ギルドは、町の北よりの外壁沿いに建っていた。

建物は、側面を白い外壁に、正面を黒と黄色い横線のラインが入ったもので建てられていた。

一瞬、邪神崇拜かなにかだろうかとも思ったが、文化なんてものは、人が勝手に作り出したものなので、気に留めないことにした。

入り口の脇に建てられた掲示板の高そうな紙を使った張り紙には、

「神はあなたの全てを見ている」

……………怖っ！！

なんか説明を聞く以前に、本能的に回避したくなった。

しかし、見た目だけで判断するのは早計、よくない。

ということで、俺は僧侶ギルドの開かれた門に入っていくた。

中に入り少し俺は驚いた。

天井まで吹き抜けて、建物の奥まで見渡すことができる造りで、奥にはおそらく信仰している神像が掲げられ、その下を壁にそって三段に分けられた椅子が並び、それを取り囲むように真ん中に台座があった。

まるで、公開審問をするかのような造りの礼拝堂だ。

「こんにちは」

俺が見慣れぬ造りの礼拝堂にカルチャーショックを受けていると声をかけられた。

その声の方を向くと、体の中心のラインを胸から足元までを黒と黄色の基調で彩られた白い外套を着ている女がいた。

「初めてお見受けする方ですね」

「ああ、このギルドに入るか決めかねているから、一応説明だけを聞きに来ただけど」

「まあ！ではあなたも『アルハン』様の御加護を受けに来た方なのですね」

キラキラとした目で俺を見る女。

「いや、その、『アルハン』サマのことがまず分からないけど」

「まあ！」

俺がそう言うと、女は驚いたように目を丸くした。

「失礼しました。アルハン様をご存知ないのでしたら、信仰を求めて来られたのですか？」

「いや、単にどんなギルドか気になっただけで……」

「……………」

「……………」

彼女は表情が固まったまま無言になってしまった。

ひとつ言っておかなくてはいけないことがある。

渡り人だからって、別に世渡りが上手いわけじゃないのよ！

さて、どうするか。

ここは大人しく帰ろうか？

俺がそう思った矢先、女は表情を和らげて話しかけてきた。

「これも、きっとアルハン様のお導きでしょう。分かりました。アルハン様の素晴らしさをお教えしますわ」

「え、いや、けっこうで」

「アルハン様は」

俺の言葉を見殺して、女は話し始めた。

仕方なく、俺は耳を貸す事にした。

彼女の話では、

- 1・アルハンというのは、この世界を作った神らしい。
- 2・全てのものに恵みと祝福を授けてくれるらしい。
- 3・黒と黄色の組み合わせはこの世の混沌を示すらしく、それを清らかに包みこむための白色だとか。
- 4・黒と黄色を使っているのは、その混沌があることを忘れず、なお清く生きるための教えだとか。
- 5・祈りはアルハンに届き、御加護を得ることができるとか。
- 6・彼女も重い病が治ったらしい。

「病が治ったってどうやって？」

「特効薬を飲みました」

え？

「それって薬のおかげじゃ……………」

「いえ！アルハン様があの薬まで私を導いてくれたお陰です」

……………駄目だ。コイツ。

「あ、説明ありがとう。じゃあ俺はこれで！」

俺は足早に出ていくことにした。

「ああ、まだアルハン様の素晴らしさの一割も話していませんのに」

「ま、また今度で！」

俺は風の如くその場を去った。

取り敢えず、僧侶ギルドは選択しから外すことにしよう。

さあ、次は魔法ギルドだ。

魔法ギルド

魔法ギルドは何やら奇妙な建物だった。

何が奇妙と言えば、まず、建物の構造として奇妙だった。

まるで木が枝分かれしたようにそびえ立つ塔がいくつもある。

一言でいうと『もっさり』した感じだ。

入り口だけはまともで、その横には「触れて下さい」と書かれて板があった。

だから触れてみた。

すると、宙に文字が浮かび上がり、「魔法を究めんとする者には開かれる」と書かれていた。

俺はこの世界にきて初めて少しワクワクした。

少し期待しながら、俺は中へと入っていった。

中に入ると、空中を彷徨う四角い物体、色が次々に変わっていく柱など色々なものがあるホールだった。

受付は目の前にあり、下を向いている女がいた。

俺は近づいて話しかけた。

「ども」

「……………」

「もしもし」

「……………」

「あゝ」

「……………」

女は何やら手元にある本に集中しているらしく、まるでどこか他に気が

づきもしない。

俺はどうするか考えていると、受付の脇に、「御用の方は鳴らして下さい」と書かれたベルらしきものを見つけた。ダメ元で俺はそのベルを鳴らしてみた。

ドガガガガガ！ドギヤーン！！

「ひゃああああ！」

「うおおおっ！！！」

てつきりもつと淑やかな響きの音かと思ったら、とんでもない騒音だった。

まるで、パソコンの起動音を爆撃音にされた気分だ。

「あわ、あわわわ」

女は持っていた本を落として、ずり下がったメガネを慌ててかけ直した。

「ああ、すみません。本に集中していて」

「いえいえ」

女は少し落ち着くと畏まったように何度もペコペコ頭を下げた。

俺もついつい許してしまう程だ。

「すみませんでした。それで、どのような御用でしょうか？」

「ああ、このギルドに入ろうか迷っているんだけど、まずは説明を聞きたいんだが」

「ああはい。入学希望の方ですね」

「入学？」

「ええ、対面的にはギルドとしていますが、本来の活動は学校のよ
うなものですので」

「なるほど」

ギルドだが、魔法を研究するところだから、学校として機能して
るのか。

というか、この世界には学校という施設があるんだな。どの程度か
は分からないが。

「ではまず、こちらに触れていただけますか？」

「ん？これは？」

「あなたの魔法力を調べるものです。素質がない方は残念ですが入
学は許可出来ないのです」

「なるほどね」

素質が無ければ、努力のしようもないもんな。

俺は言われた通りに、四角い透明な箱に手を触れた。

触れたが、箱には何の変化もなかった。

「ああ、残念ですがあなたには魔法の素質がありません」

「そうか。まあ俺も期待はしていなかったけど」

だって俺、召喚士だもん。

召喚する時、MPみたいなものは使っけど、実際にこの世界でいう
ところの魔法力じゃないし。

本当に期待なんかしてなかったよ。本当だよ！

「まあ、折角来たんで、このギルドの説明だけでもお願いするよ」

「ええ、その程度でしたら」

そう言っ てメガネをかけた女は快く引き受けてくれた。

「このギルドは、簡単に言いますと『魔法』を研究し、その成果を
売ること で運営されています」

「成果を売るって いうのは？」

「簡単 なところ ですと、例えば薬草の効用を最大限に引き出すため
に魔法を使い、それで出来上がったものがポーションです」

「へえ、つまりポーションはここで調合されてるわけだ」

「そうですね。後は、新しい魔法技術を発明して、その方法を売る
ことなどが大きなものとして挙げられます。良い研究成果であれば、
その国のお抱え魔法士になれる場合もあるんですよ」

「なるほど」

「まあ私どもギルドではそういうことはまだ一度もないのですが」

「はは、頑張ってください」

この世界で魔法というものが、割りと重要な扱いであることがわか
ったような気がする。

「大雑把ですが、説明できるのはこれぐらいですね。何かご質問は
ございますか？」

「うーん。そうだな……」

俺が何か聞こうか迷っていると、視界の隅ある扉が開いた。

そこに現れたのは、真紅のローブを着た女だった。

「アリッサ！ お願い！ あと少し研究費用を私のところに回して
！」

「……またですかコーリアさん」

コーリアと受付のアリッサに呼ばれた女は、俺のことは構いなしに受付の前を陣取った。

「あとちよつとなの！ あとちよつとで、研究が完成するのよ！」

「前もそう言ってたじゃないですか。学長からしばらくコーリアさんには費用を出さないように言われてますから無理です」

「あのクソジジイい。……ねえ、いいでしょ？ お願い」

「猫かぶつても無理なものは無理です」

「けちー！どけちー！」

完全に空気です俺。はい。

「じゃあ、俺はこれで……」

俺は出ていくことにした。

が、服の袖を誰かに掴まれた。

「……………あの」

俺が袖を掴んでいるコーリアに話しかける。

すると彼女はニヤリと笑いこちらを見つめてきた。

「ねえ？ お兄さん？ 私に資金援助しなあい？」

「しないが？」

「即答！？ ちょっと酷くない！ こんな美女がお願いしてるのに！」

「俺の好みはもっと淑やかな女性なんで」

俺がそう言つと彼女はすつと身を整えて、控えめこついった。

「お願いしますわ。あ・な・た」

「いや、やっぱり強気なしたたかな女性が好きで……」
「どんと私に任せて投資しなさい！」

コーリアは胸をドンと叩いて高々に宣言する。

「いや、実はもっと淫靡な感じの女性が好きだから……」
「夜の方もサービスしてあ・げ・るう」

コーリアは体をクネラせて、寄り添うようにして俺の耳元でそう囁く。

「いやいや、本当はもっと甘える感じの年下の妹的な女の子が……」
「おねがしい。おにいちゃん」

コーリアは上目遣いで、目を輝かせながら満面の笑みで俺に言う。

「あんた面白いなー」
「ホント！　じゃあ資金援助してくれる！？」

俺はニヤリと笑い、彼女も期待に満ちた目をして、

「だが、断る！」

「この悪魔ああああああああああ！！」

なんて、からかいがいのある女だろう。

「もういいから有り金全部置いてきな！」

コーリアはキレたのか俺の襟首を掴んで脅してくる。

「受付のお姉さんどうにかして」

俺がそう頼むと、アリッサは拳ほどの大きさの球体を手に持ちこつ言った。

「町の自警隊に通報しました」

「いやあああ！やめてええええ！うそ！うそです！」

コーリアはその場で悶える。

「もう！ どうしたら資金援助してくれるのよ！」

怒った様子のコーリアは、その場で地団駄を踏む。

その様子を見て、俺は一言こついった。

「そのままの君が可愛いよ」

「はあ！？ ちょ、ちよつと、このタイミングで口説くとか、い、意味分かんないんだけど／＼」

コーリアは、そういうものの照れたように頬を赤くし、顔を背ける。そしてそんな彼女に俺はこつ言った。

「あ、リップサービスーギラ（この世界の通貨の単位）になります」「死ね！死んでしまえ！！ もう知るか！ うわーん！」

そう言ってコーリアは、建物の中に帰っていった。

「なんか騒いでわかった」

「いえ、うちの学生がご迷惑をおかけしまして」

「いや、楽しかったからいいよ。それじゃあ俺はこれで」
「はい。何か御用がありましたら、魔法ギルド『レーテス』にまた
お越しください」

俺はそうやって魔法ギルドを後にした。
なかなか面白いギルドだった。

さて、最後は盗賊ギルドだ。

魔法ギルド（後書き）

戦士ギルド『スラッシュ』から『ドーン』に変更。
ダサかったので

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3096z/>

世界を渡る召喚士

2011年12月14日21時57分発行